

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 28 日現在

機関番号：33903

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23501182

研究課題名(和文) 教師・教員志望の学生・研究者による共同的な授業分析に関する研究

研究課題名(英文) Study of Collaborative Lesson Analysis by Teachers, Teacher-Students, and Researcher

研究代表者

坂本 将暢 (SAKAMOTO, Masanobu)

愛知工業大学・工学部・准教授

研究者番号：20536487

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：教師の分析視点の特徴は、教師の発問の仕方、子どもの特徴的な発言、授業全体の雰囲気だった。教師の指示や確認の回数を数え、それが多すぎるのではないかという結論を出したり、教師が主導的に授業をしている部分が生活指導をしている部分であることを明らかにしたりした。授業改善を目指した視点で授業分析に臨んでいることが明らかになった。

教員志望の学生の分析視点の特徴は、机間指導、教師の教え方、授業展開のパターンだった。極所に注目するというより、授業全体に視点が向いている。分析方法は、複数の分析方法を組み合わせることで授業分析に取り組んでいることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The characteristic of the analysis viewpoint of teachers was a way of teachers' questions, the characteristic remark of the child, an atmosphere of the whole class. Teachers as researchers counted the number of times of instructions and the confirmation of the teacher, and it gave the conclusion that there might be too much. Teachers made clear that lesson's beginning part which teacher taught was the part which he did living guidance. We made clear that we faced class analysis in a viewpoint aiming at class improvement.

We found the characteristic of the analysis viewpoint of the teacher-students which has a pattern of the instruction between the desk, the teaching of the teacher, and the class development. It was revealed that the analysis method put plural analysis methods together and worked on class analysis.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：教育工学

キーワード：授業研究 授業分析 教育工学 教育方法学 教師教育 キャリア教育

### 1. 研究開始当初の背景

これまでに、授業研究のための様々な方法が提案されている。それを申請者は、(1) 小金井[1]らのカテゴリー分析、井上[2]の授業アセスメントなどの研究的・分析的・理論的な方法である「研究者だからこそできる授業研究」、(2) 教師の同僚性や、学校全体で研究するための組織づくりに着目した方法である稲垣[3]らの授業カンファレンス、生田[4]のオン・ゴーイング法などの「授業者(教師)にもできる授業研究」、(3) 研究室で研究者が、学校で教師が、個別に取り組むのではなく、共同研究として行うものである木原[5]の授業者と研究者による共同研究、佐藤[6]や秋田ら[7]のアクションリサーチ、名古屋大学と東海市[8]の取り組みなどの「研究者と授業者(教師)でできる授業研究」、(4) 細見[9]が取り組んでいる、教師が有する授業に関する種々の暗黙知を形式知に変換してほかの教師に伝達する「授業者(教師)だからこそできる授業研究」の4つに分類して整理してきた(坂本 2009)。

ところで、授業分析は、分析者の授業記録の読みと解釈を中心に行われてきた。しかし、授業記録の読みと解釈は分析者による暗黙的な作業であり、共同研究者等との解釈の共有は難しい。申請者は、観察記録の共有と分析過程の明示によって、共同研究者あるいは読者との解釈の共有が可能になると考え、次の授業分析のためのツールを開発してきた。

・【授業分析用ワークシート】(坂本 2008)

・【授業分析を支援するためのカード】(坂本 2009)

・【タブレットコンピュータで利用する授業分析用のwebアプリ】(坂本 2010)

以上を踏まえて、上述の4分類に「研究者と教師と学生で取り組む授業研究」を加え、その形式の授業研究の実現に見通しを得るに至り、本研究では、国内外の研究者と教師、そして教員志望の学生を分析対象に、授業に対する専門的知識と視点の明確化と理論化を試みる。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、(1) 教育現場での授業経験者と未経験者(学生)が有する専門的知識と授業に対する視点の違いを、授業分析の際の解釈や結論などを手がかりに明らかにすること、(2) これまで教師が授業の中で直感的に行ってきた意思決定などを、授業分析の中での教師自身による言語化をとおして明らかにすること、(3) 以上の研究から、一般的に実践知と呼ばれるものを、理論知にして社会に還元することである。

### 3. 研究の方法

本研究では、暗黙的な実践知を形式的な実践知に変換するために、申請者がこれまでに開発して用いてきた授業分析用ワークシート、授業分析を支援するためのカード、そしてタブレットコンピュータで利用する授業分析用のwebアプリを用いる。また実践知か

ら理論知にするためにグラウンデッド・セオリー等の質的な分析手法を用いる。

(1) 開発してきた各ツールの利用による実践知の形式化：各ツールに分けて述べる。

・授業分析用ワークシート：1回の作業が終わる毎にコピーをとって作業過程として蓄積する。それを質的研究の文書分析や、統計的な処理による内容分析をし、分析者が何に着目し、どのように記しているのかを明らかにする。

・授業分析を支援するためのカード：カード利用のタイミング、分析者が支援を必要としている分析視点などについて、グラウンデッド・セオリーを用いて利用の様子を明らかにする。

・タブレットPCで利用する授業分析用のwebアプリ：本ツールは、分析者が授業映像を見ながらコメントを付すものである。ログ等の解析を手がかりに、どのようなコメントをどの場面に付したのか等を明らかにする。

(2) 教師教育のために果たす授業分析の役割：授業分析に取り組む教師や学生の様子を参加観察し、教育現場での授業経験者と未経験者が有する専門的知識と授業に対する視点の違いを明らかにする。また、どのように教師・学生・研究者が問題を共有することで、潜在的な教育的課題を発見し、理論的な背景を有した解決の方途を導くことが可能かを明らかにする。

(3) 開発したツールの活用の可能性：開発したツールは、授業分析のために開発されたものであるが、近年の授業研究は、教員研修で行われたり、ワークショップ形式で実施されたりしている。このような場面でも活用して、授業分析以外での活用の可能性を明らかにする。

### 4. 研究成果

初年度は、本研究の目的のうち、授業の未経験者である学生が有する授業に対する視点の明確化と、教師が授業の中で直感的に行っている意思決定の明確化に取り組んだ。前者の授業に対する視点の明確化では、教員になることを志望する学生を対象に、アンケート調査を実施した。アンケート調査の対象は、非教員養成の大学に通う4学年の学生218名に実施した。この調査対象の学生を、1年生と2年生のグループと、3年生と4年生のグループに分け、統計処理を行った。その結果、次のことが明らかになった。教職課程の授業を楽しむ(第1因子)、学外で学ぶ意味(第2因子)、学校訪問の重要性(第3因子)、教職課程の意義(第4因子)、そして学生による授業分析(第5因子)に分けることができた。第3因子に着目したとき、下位学年では、第4因子との相関が強いが、第1因子と第2因子とは相関が弱い。一方、上位学年では、第1因子と第2因子との相関が強いが、第4因子とは相関が弱い。また重回帰分析の結果、下位学年の学生は、教育現場に何かしらの幻想を持っているのに対して、授業分析や教育

実習を経た上位学年は、教育現場を“現状”と捉え、そこから肯定的なことも否定的なことも学び、自らの授業観や生徒観、そして教育観を養っていることがわかった。後者の教師が授業の中で直感的に行っている意思決定の明確化では、海外（フィリピン）の教育委員長と教育委員と教員を対象にインタビュー調査を行った。現在のところ、教師の専門職性、同僚性、そして自律性が日本の教師文化を支えていること、その支えは日本型の教師教育や授業研究が基盤にあることが明らかになっている。また、教育支援関係の事業における個人情報漏洩事件の発生についても調査した。これは、情報機器の導入が進み、これからの教員に求められる資質として、情報モラルも含まれると考えるからである。

2年度目は、とくに、教師に求められる資質・能力、とくに職業観や社会観などを含む社会力に注目し、教師の専門性について調査・分析した。具体的には、日本の教員志望の大学生と、海外の教員に、教師を志望した理由、それをサポートした人物の存在の有無と内容、生きていく上で必要と思われる資質能力などについてアンケート調査し、統計的な手続きを経て、考察をした。その結果、日本の教員志望の学生の特徴は、幸せな家庭を持つこと、興味関心を追い求めること、他人と良い関係を築くこと、ストレスなく働くことに重視しており、比較的、自己の利益を優先する項目でスコアが上回っていることが明らかになった。一方、海外の教師は、地域の発展のために貢献すること、いい仕事に就職すること、地域社会に奉仕することに重視しており、比較的、他者と利益を共有する項目でスコアが上回っていることが明らかになった。

最終年度は、現役の教師、教師志望の学生、そして研究者の授業分析の観点の違いについて明らかにすることに努めた。そこで、夏期休業中の教師の学習会と、教員養成系大学と非教員養成系大学の教員志望の学生を集めた授業研究会および模擬授業で、授業分析を実施した。いずれの場合も、研究代表者が本研究の目的と意義を述べた後、参加者の了解を得て実施した。分析で用いた授業映像は同じもので、分析前に参考に教示した分析方法は、SP表分析法、カテゴリ分析、発言表、ST分析法、分節わけである。教師の学習会での分析視点の特徴は、教師の発問の仕方、子どもの特徴的な発言、授業全体の雰囲気であった。例えば、問題を解いている時間と何もしていない時間があること、つまり、子どもたちの待ち時間があることを、ST分析法を使って、傾斜が緩やかになっていることを呈示しながら明らかにした。また、教師の指示や確認の回数を数え、それが多すぎるのではないかという結論を出したり、授業最初に教師が主導的に授業をしている部分は生活指導をしている部分であることを明らかにしたりした。このように、授業改善を指向し

た視点で授業分析に臨んでいることが明らかになった。教員志望の学生の授業研究会などでの分析視点の特徴は、机間指導のパターン、教師の教え方のパターン、授業展開のパターンであった。授業の極所に注目するというより、授業全体に視点が向いているように思われる。分析方法も、呈示したカテゴリ分析とST分析法、分節わけとカテゴリ分析、発言表とカテゴリ分析のように、複数の分析方法を組み合わせる授業分析に取り組んでいることが明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計 0件)

(学会発表)(計 7件)

1. 坂本将暢、黒板前の教師の動きに基づく教師教育のあり方、日本教育工学会第29回全国大会課題研究発表、2013年9月23日、秋田大学
2. SAKAMOTO, M. & AVENDANO, F., Development Software for Visualization of Teachers' Action for Lesson Study, The World Association of Lesson Studies International Conference 2013, 2013年9月8日、University of Gothenburg (Sweden)
3. SAKAMOTO, M.・AVENDANO, F.・CARLEEN, S.・GONZALES, C.・HORAI, T., Job consciousness of pre-service and in-service teachers: Based on a comparative study of Lesson Studies in Japan and Philippines, The World Association of Lesson Studies International Conference 2012, 2012年11月29日、National Institute of Education (Singapore)
4. SAKAMOTO, M., Study of Job Consciousness of Pre-Service Teacher Training Students, 2012 8th AASVET (Asian Academic Society for Vocational Education and Training) International Conference, 2012年11月10日、忠南大学(韓国)
5. 坂本将暢、教員志望の学生が求められる教員の資質・能力としての「社会力」-非教員養成系大学の教職課程の学生へのアンケート調査を手がかりに-, 日本教育工学会第28回全国大会、2012年9月15日、長崎大学
6. SAKAMOTO, M. & HORAI, T., Students' Analyzing the Lesson as Pre-Service Teacher Education in a Teacher Training Course of the Institute, The World Association of Lesson Studies International Conference 2011, 2011年11月27日、東京大学

7. 坂本將暢、非教員養成系大学の教職課程における教師教育を目指した授業分析の取り組み -プレ・サービス教育のための授業分析ツールの開発と利用-、日本教育工学会第 27 回全国大会、2011 年 9 月 18 日、首都大学東京

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

坂本 將暢 (SAKAMOTO, Masanobu)

愛知工業大学・工学部・准教授

研究者番号：20536487

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：